



## 平成23年度研究助成 【音楽振興部門】より

…いま蘇える音楽…

### 大澤壽人 — センセーションを呼ぶ作曲家 —

神戸女学院大学 音楽学部  
非常勤講師 博士(文学)  
大澤資料プロジェクト代表

生島美紀子

「時は21世紀、遂に私の時代が来た！」

ジャケットの帯にこう書かれたCDは、大澤壽人(おおさわ・ひさと、1906-53)作曲の《ピアノ協奏曲第三番 変イ長調 神風協奏曲》。2004年文化庁芸術祭レコード部門最優秀賞を受賞し、大きな話題となった。

監修にあたった片山杜秀氏によれば、副題は朝日新聞社所有飛行機「神風号」を意味する。初演は1938年で、70年以上も前の作品である。

しかし私たちが驚かせたのは、その斬新な響きだった。例えば冒頭、大胆な動機をオーケストラが短く呈示すると、独奏ピアノが入ってきて豪快にフレーズを締めくくる。

颯爽とした楽想と和音の力強さは、21世紀になっても全く古さを感じさせない。作曲家は「時代を超えたモダニスト」と呼ばれてセンセーションを巻き起こした。

しかし、不思議に思えるのは、この作曲家が日本洋楽史において無名だったことである。大澤壽人とは一体どんな人物だったのだろうか。

人々の関心が集まり始めた頃、長男大澤壽文おおさわとしふみ氏から神戸女学院に遺品が寄贈された。1万枚を超す自筆譜を中心に、演奏会プログラム、書簡など、約3万点に及ぶ膨大な資料群である。学院では「大澤壽人遺作コレクション」と名づけ、詳細な調査と研究が始まった。

以下は、5年にわたってコレクションに携わり、2冊の目録(音楽クリティック・クラブ特別賞を受賞した『煌きの軌跡』、及び『煌きの軌跡Ⅱ』)を編纂した私たち、大澤資料プロジェクトが見た実像である。寄贈前、大澤の作品は70数曲のみが知られていたが、作品総数は作曲・編曲合わせ約966。見上げるような業績を遺し、華麗な音楽活動で生前からセンセーションを呼んでいた。ここでは47年の生涯のうち、輝かしい成果を取めたボストン・パリ留学期から帰国後の《神風》初演までを中心にご報告したい。

大澤は1906年神戸生まれ(通説の1907年とは異なる)。関西学院高等商業学部を卒業した1930年にボストン大学音楽学部に入學、正式な作曲の勉強を初歩から始めた。

1932年からはニューイングランド音楽院にも籍を置き、コンヴァースの指導を受けた。この学校は日本初の官費音楽留学生、幸田延が入學したことで知られており、同音楽院における日本初の作曲専攻生が大澤である。

ボストンでの4年間の滞在が後半に入る頃、創作ジャンルは小編成な室内楽から大規模な管弦楽へと移行。才能が一挙に開花して、以後の2年間で「総譜約900頁」という驚異的な量を作曲した。例えば、1933年5月完成の《ピアノ



神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」

### ボストン留学時代

協奏曲第一番 イ短調》は「日本初のピアノ協奏曲」を目指す（現在ではそれ以前に諸井三郎作曲があると判明）と意気込んだ卒業作品で、作曲を習い始めてわずか2年8ヶ月目に126頁の大作を書き上げた。

翌6月の卒業式の晩には、ボストン交響楽団のメンバーから成るボストンポップスオーケストラを指揮して自作《小交響曲》を披露。小沢征爾氏に先駆けること40年、同楽団を指揮した初の日本人となった。

こうした大澤の急成長は、何によるのだろうか。

ボストン交響楽団演奏会の影響が大きい。同楽団は1930年に創立五十周年を迎え、記念演奏会として委嘱作の世界初演シリーズを行った。ストラヴィンスキー《詩篇交響曲》、オネゲル《交響曲第一番》など、20世紀前半の西洋音楽史を彩るこれらの作品はボストンで初演されている。

大澤がボストン響の定期会員になっていた1931-34年、当時の演奏曲目を「初演」に限っ

ても16の世界初演と14のアメリカ初演が並び、プログラムは壮観の体をなす。

大澤が耳にしていたのはこうした最先端の音楽である。調性衰退後の1930年代は、無調における作曲法が多様に試みられた時代で、ボストンシンフォニーホールは20世紀における「現代音楽」のメッカだった。新しい音楽が放つダイナミックな力をリアルタイムで感じる — この経験が「モダン」といわれる作風に直接的な影響を与えたのである。

卒業後の1934年には作品発表会が既に2回開かれ、ボストンでは新進作曲家として知られる存在になっていた。「世界に通じる作曲家になりたい」と書簡に綴るようになるのもこの頃。新作発表は常にセンセーショナルな反響を呼んだ。そのつど気持ちはヨーロッパ楽壇に向けて高まり、大志を抱いて出帆した。

1934年10月フランス着。当時のパリは、難を逃れて自国を離れ「パリ楽派」と呼ばれた外国人作曲家たちが活躍する華やかな楽壇だった。1930年代に訪日したロシア人A・チェレプニン

やポーランド人タンスマンもそうであり、大澤は後に「日本からのパリ楽派」と認められるほどの成功を取めることになる。

パリでは大家デュカと名教師の誉れ高いブーランジェに師事した。レッスンが始まると、デュカは意外な古典尊重だったが精神的な絆を与え、ブーランジェはパリ・デビュー用の作品創作に助言を与えている。

既述の成功を取めた演奏会は、1935年11月8日、サル・ガヴォーで開催された。大澤はコンセール・バドゥルー管弦楽団を率い、《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番》歌曲《桜に寄す》を発表、ベルリオーズ、ラヴェルなどの作品を指揮し、自作自演の作曲家として、またフランス作品を振る指揮者としてもデビューした。

当夜は「フランス六人組」のオネゲル、ミヨーに加え、イベール、グレチャニノフなど、きら星のような作曲家たちが来場。演奏会評では、イベールが「天賦の才能」と称賛し、ブリアンが「パリ楽派」に例えた。このように、華麗な経歴を築いて留学期を締めくくり、1936年2月神戸に帰港した。

帰国後は休むまもなく、5月東京、6月大阪で「婦朝演奏会」を連続開催。翌1937年も4月東京、12月大阪で新作発表会を続けた。しかし東京公演は以降みられず、大規模な作品発表も1940年大阪が最後になる。《神風》はその間の1938年大阪で初演されている。

この時期、大澤は2つの問題に直面していた。1つは、留学で身につけた作曲法や発想が楽壇の現状とかけ離れているのである。「婦朝演奏会」を聴いたある評論家は、パリで喝さいを浴びた作品について「…外人のあらゆる讃辞にも拘わらず、遺憾ながら私としては同様の讃辞を呈するわけには参らぬ。…大澤氏は…一個の大きな統一された内容にまで、発展させ…る事が出来ない」と述べている。

《神風》に向けられた評は、時局の問題が重くなって辛辣である。「…際物的な標題が、一層



神戸女学院所蔵資料  
「大澤壽人遺作コレクション」

1937年頃 帰国後

この作品を冗らない物にしてしまった。神風応援歌の一節位は期待した聴衆は、啞然としていた…」

これらの批評は、当時の音楽観と聴衆のレベルを露呈している。前者は「統一」という18世紀来のドイツ音楽の理想から批判しており、後者には1938年のベストセラーレコードが内閣情報部撰定《愛国行進曲》だったという社会背景がある。つまり、このような批評家や聴衆にとって、20世紀イデオロムを用いた大澤の音楽は余りに異質で、理解困難に陥ったと思われる。そして時局はさらに悪化していった。後日、大澤は「…大東亜戦争になり、…音楽どころではなくなって行った…」と書いている。

以上、成功につつまれた留学期から帰国後の《神風》初演までをふり返ったが、戦中・戦後も大澤の溢れる創作力は衰えなかった。批判に屈することなく、音楽発信の場を演奏会場からラジオ、舞台、映画へと移し、多大な数の作品を遺した。

ことに晩年はNHK大阪放送局と朝日放送で

番組をもち、400を越す編曲作品を書いて、聴衆への啓蒙的な役割を担った。またジャズをとり入れた作品は人気を呼び、「時代の寵児」と言えるセンセーショナルな活躍ぶりだった。急逝したのはその只中。世界的レベルの作曲家を失ったのである。

戦争に阻まれ、活躍はテレビ登場前の時代でもあり、忘れられて半世紀。復活した大澤の音楽を、21世紀の聴衆はセンセーションをもって迎え入れた。私たちはこのような作曲家が第二次世界大戦前の日本にいたことを誇りに思い、今後、豊かな功績を広く伝えてゆきたいと考えている。

2012年3月3日にシリーズ演奏会「大澤壽人スペクタクル」第3回を大阪で開催して知られざる作品を紹介するほか、カワイサウンド技術・音楽振興財団の助成による「録音プロジェクト」、及び『評伝』執筆が進行中である。数年後には、自作自演の貴重な音源資料をもとにCDをリリースし、大澤からの「未来への遺産」にしたいと願っている。